

# 御所桜三段目 弁慶上使の段

『平家物語』『義経記』をもとに、土佐坊昌俊による堀川御所の義経襲撃や、義経・伊勢三郎・弁慶・静御前などに関する伝説を劇化した五段立ての時代物です。文耕堂・三好松洛の合作で、元文2年(1737)に大坂竹本座で初めて演じられました。

舞台は、侍従太郎の館。義経の正室・卿の君(きょうのきみ)が、この乳人(めのと)の館で身重のため静養しています。彼女が平家一族の平時忠の娘ということで、義経は兄頼朝から謀反の疑いをかけられていました。ある日、鎌倉方の命により、武蔵坊弁慶が上使(幕府の上意を伝える使者)として館に現れます。主の侍従太郎と奥方の「花の井」が弁慶を出迎え、卿の君も元気な姿を見せますが、何やら内密の話があるというので、一同奥へ消えます。腰元としてこの館に仕えていた「しのぶ」は、久しぶりに訪ねてきた母親の「おわさ」と楽しげに話しています。しばらくして花の井たちが姿を現し「姫君(卿の君)の首討って渡せ」との命令が鎌倉から出されていることを伝えるのでした。しのぶは「ふつつかな私でもお役に立つならば」と身代わりを申し出ますが、母親のおわさは「この子の父親に手渡しするまでは・・・」と必死に拒みます。侍従太郎に「何を証拠に父親を尋ねるぞ」と詰問され、赤いじゅばんの片袖を見せます。そしてしのぶを生んだいきさつを語りはじめますが、この「くどき」の場面こそ歌舞伎の醍醐味です。様子を立ち聞きしていた弁慶は、いきなり襖越しにしのぶを突き刺します。取り乱すおわさを制し弁慶が片肌を脱ぐと、そこにはおわさと同じ赤い振袖！ 初めて会ったわが子を、いくら忠義のためとはいえ自分の手にはかけなければならなかった弁慶。泣かぬ剛勇弁慶の、涙に曇る「御所桜」。卿の君(実は我が子)の首と自害した侍従の首を抱え、威風堂々と館を去っていく彼の心中は・・・。

姫路市別所町の旧山陽道沿いに、弁慶が福居村の庄屋の娘・玉苗と一夜を共にしたと伝えられている「弁慶地蔵堂」があります。この話が歌舞伎化され「福井村の本陣で弁慶はおわさと妹背の縁を結んだ」となっていったのでしょうか。